

た。みんなで一緒に飲んでください」と唱えるのだそうだ。

ほかにもふたりから、大木の株元に酒を供える話を聞くことができた。いずれの話しても、酒を供える木はムブラであった。しかし、かつてはムブラではなく、この地域にたくさん生えていたミオンボの樹種が主に用いられていたという話も聞いた。ミオンボ林が伐り開かれてゆく過程で、食料や乾季の日陰、薪など、多目的に利用できるムブラが伐り残され、いつしか聖なる木として利用されるようになってきたのかもしれない。

現在、畑に残されているムブラのほとんどは、薪用に毎年枝が切り落とされるが、酒を供えるムブラだけは枝が切られることはなく、枝が大きく張り出して、葉が茂って、畑に濃い陰をつくっている。残されているムブラのうち、こうした樹形の木は少なく、儀礼に使われているものはほんの一部にすぎないことがわかるが、他の樹種木の伐られ方と比較し

てみても、ニイハはムブラを幹から伐り倒すことに何らかの抵抗をもっていることは間違いない。たとえ今は使われていなくても、かつて祖霊の宿る木として扱われていたという記憶が伐採を斟酌させている可能性もある。いずれにせよ、祖霊信仰をもつ人々にとって、ムブラは祖霊と現世をつなぐ特別な木であり、大切に守られてきたのは確かである。

私が調査している村の周辺では、林がほとんど伐られてしまい、在来の木の名前や特性を熟知している人も多くない。そのため、調査地に一部残された林を調べるのにも苦労した。また、多くの子どもたちは、果実のなる木の名前は知っていても、それ以外の木には関心がなく、失われてゆく在来の知識を憂うこともあった。しかし、今回、畑にムブラが残されている理由を追いかけるなかでニイハとムブラとの多様な関係に触れ、開発がすすむ社会のなかで顕在化してきた人と木の深甚な関わりをかいまみることができた。

ビエンチャン市民の生活にみるピーマイ・ラオ（ラオス正月）

森 一 代*

4月上旬のラオスの空は綿あめのような雲が青い空によく映える。洗濯物を干しながら吸いこむ朝の空気はまだひんやりとしていて、小学生の頃の夏休みの朝を思い出す。

今年のラオス正月（ピーマイ・ラオ）は4

月14日から16日までの3日間。とはいえ、お正月モードはそのすこし前から始まっている。地方へ帰るひとや、旧首都であるルアンパバーンで新年を迎えるひとは、バスの混雑を避け早めに帰省を開始する。南部方面のバ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

スターミナルに続く道には、土産用の巨大なフランスパンの屋台が等間隔で並ぶ。正月中は、大抵の店は休業する。日本との連絡には欠かせない行きつけのインターネットカフェも然り。鍵のかかった入口には、新年の象徴である山吹色のドーククイーの花が置かれている。

お世話になっている下宿先は、ビエンチャン市の官庁街であるボンサイ村でラオス料理のレストランを経営している。「1,000 kip (10円強)でも稼げるときは稼ぐ」がモットーのわが家は、正月中もずっと店を開けている。そんな商売熱心な家族ではあるが、ピーマイに浮き立つ心は、ほかのラオス人と変わらない。いつもおしゃれに気を使わないウアイレー（レー姉さん）も10日以降身につける金銀の数が目に見えて増えた。金銀以外にも貝殻やガラスのアクセサリを市場で買いこみ、家族とお揃いでピーマイの装いを楽しんでいる。

肝心の商売のほうはというと、ラオス人の常連がアロハシャツ姿の親類を10人以上引き連れてつぎつぎと料理を注文してくれている。さすがにピーマイだけあって、財布の紐も普段より緩い。ラープ（挽肉と香草のサラダ）をつまみ、午前中からビアラオ（ラオスの国産ビール）のおかわりがひっきりなしに出る。おかげで初日は午前中だけで70万kip（7,000円強）以上の売り上げを記録し、ウアイレーは酒杯にペプシコーラの瓶を開けた。しかし2日目になると、前日のわが家の売り上げの噂が近所中に広まり、3軒隣の競合店も店を開けてしまった。この様子

では、ボンサイ村で新年休業のドーククイーの花がみられなくなるのも、そう遠くはなさそうである。

ところでピーマイになくってはならない風習として、必ず挙げられるのが水掛けである。

この水を掛けるという所作には、「悪いものを洗い流す」という意味がある。つまり、水を掛けられることは運を呼び込むことでもあり、ラオスの人々にとって非常に喜ばしいことなのである。12日頃から町中では水鉄砲を手にした子どもたちが頻繁にみられるようになる。ピーマイになると、そこに大人が加わる。設備もポリタンク数個に水道のホースをつないだ大がかりなものとなる。いよいよ水掛けの始まりである。

「犬も歩けば棒に当たる」ではないが、道を歩けば「はい、止まって」と数人がかりで顔に小麦粉を塗られるわ、時にはビール瓶ごと口に含まされるわで、しばしの立ち往生となる。もちろんこの間にも幾人かがプラスチックの手桶やピッチャーで、ひっきりなしに水を掛けてくれる。立ち去るときには間違いなく全身濡れ鼠である。自転車やバイクでも同様だ。ゆえに外出時には貴重品は前もってビニール袋に入れて持ち歩かないと、大変な被害を被ることになる。

水を掛けるのは、道のほとりで待機している人だけではない。荷台に溢れかえりそうなほど若者を乗せた車からは、水、若しくは色水のはいった小袋が投げつけられ、時には対向車との空中戦が繰りひろげられる。夕暮れにビエンチャンの街を歩くと、無数の破れた小袋が道に散乱している光景をみることで



写真1 水掛けを楽しむ人々（著者撮影）

きるだろう。

ちなみに個人的な経験からいうと、水は掛けられるよりも掛けるほうが遥かに愉快である。2日目は同じ村の人たちと一緒に、ネルー通りを通る車やバイク、トゥクトゥク（三輪自動車）に無差別に数時間水を掛け続けた。

もうひとつのピーマイの習わしは、「ソンプ」と呼ばれる仏像への水掛けである。1日に9つの寺をまわる。日中は日差しが強いため、午後から日が暮れるまで一気に寺詣でを済ませる。持ち物は小さなバケツに小椀。バケツのなかには香水とサフランを加えた水、そしてラオスの国花であるチャンパー（プルメリア）の花びらが浮かんでいる。寺に行く道すがら、友人は街路に生えたバイクーンの枝を数本拝借し、バケツに入れた。

どの寺院も、入口周辺には露店が軒を連ね、多くの参拝客で賑わっている。黒米やココナツのお菓子、香草のはいった卵の串、鍋いっぱい肉団子。そしてピーマイの風物詩ともいえる、バナナの葉を編んだ特製の帽子売りがある。歩みをすすめると、黒い洗濯桶



写真2 バナナの葉で編んだ帽子は大人気！（著者撮影）

を並べた水売りの姿がみられる。持参した水を掛け終わると、ここで新たに買い足すことができる。

仏像に水を掛けるときは、先ほど拝借したバイクーンの枝を水につけ、仏像に振り掛ける。枝がゆっくりとしなり、水しぶきがきれいな流線型を描きながら仏像に掛かる。ピーマイの喧騒のなかで唯一優麗な瞬間でもある。確実に水を掛けることは一見容易くみえるが、実際にやってみるとなかなか難しい。

仏像の種類もさまざまである。たとえばシーサケット寺院には曜日毎に仏像があり、各々の生まれた曜日の仏像に水を掛ける。水を掛けたあと患部に手を添えることで、病が治るとされている仏像もある。外廊では、老女が濡れた床の水で足を滑らせないように気を配りながら、仏像の足に手を沿えていた。ときどき見知らぬひとが、バイクーンで水を振り掛けてくれ笑顔を交わす。9つの寺をまわり終わる頃には日はとつぷりと暮れ、濡れそぼった服からは冷たさを覚えるほどであった。

ピーマイの最終日は、ビエンチャン市内か

ら 30 km ほど郊外にあるタンピアオ村に出掛けた。ここはピーマイになると多くのラオス人が足をのぼす行楽地でもある。タンピアオ村に行くには川を渡らないといけない。車やバイクごと渡し船に乗せ川を横切る。雨期も間近なこともあり、川はなみなみとコーヒー色の水を湛えている。

メイン会場は川に面しており、大音響でラオスやタイの歌謡曲が流れている。会場はさながら海水浴場のようなのである。岸边には焼き魚、クアミー（米麺の甘辛炒め）、焼き鳥、かき氷、ロティー（インド風クレープをアレンジしたもの）などありとあらゆる食べ物の露店がならぶ。露店の奥は椅子や莫蔭を敷いたフリースペースになっており、ラオス人客が輪になって宴を楽しんでいる。なかにはラオハイ（ラオスの醸造酒）の甕を持ち込み、ストローを何本もさして吸い合っている客もみかける。水辺に足を向けると、子どもから大人までが服のまま、水を掛けあっている。浮き輪売りも浅瀬に居座り、白鳥や兎を象った浮き輪の販売に余念がない。

友人の奥様はタンピアオ村の出身で、実家

は毎年ここでラオス料理店を出店しているそうである。この日は親戚一同と席をともにさせていただいた。莫蔭の上には、バーベキュー、ピンパー（焼き魚）、トムカイ（鶏のスープ）、タムマークフン（青いパパイヤのサラダ）、カオニャオ（もち米）などの正月料理が並ぶ。ピンパーの魚は実は養殖で、市内の市場で仕入れたものを使っているということであった。ほどなく奥様のお父さんがこの川で捕ったという、なまずの炭火焼が皿に追加された。気のせいかなまずのほうは、臭みもなく菌ごたえもあり美味であった。

宴の飲み物はビアラオ、ラオトムで回し飲みが基本である。ラオトムは明るいレモン色をしていて、甘酒にも似たゆるい発酵特有の味がする。氷を加えてきゅっと冷たくして飲むと、茹だるような暑気によく合う。隣に座っていたのは、ビエンチャンの空港のレストランで調理を担当しているという、21歳のガトゥーイ（ラオス語でトランスジェンダーを意味する）であった。素敵なウェスタン調の帽子をかぶっているねと言うと、タイのノンカイにある大手スーパーのTESCO



写真3 タンピアオ村の水辺にて（著者撮影）



写真4 屋外での食事（著者撮影）

LOTUS で 50 パーツで購入したとのことであつた。

それにしても、午後の日差しはすさまじい。じっと座っているだけでじりじりと肌を刺すような暑さである。お腹も満たされ、人々は思い思いに立ち上がり、川に涼を求めに繰り出す。川の流れはゆるやかでコーヒー牛乳色をしている。皆足が立つところで水を掛けあっている。私も友人やガトゥーイらと水を掛けあいながらわけもなく笑いあう。彼女の家は、近くのビエンカム村で、この正月は連日タンピアオに来ていると話していた。宴は夜まで続き皆は莫藪の上で寝ると言っていたものの、私はバイクで来ていたため友人

と一緒にさきに帰途につく。小腹が空いたという友人とカオピヤック（ラオス風うどん）をかきこんで帰宅するともう日は沈んであたりは真っ暗であつた。お尻が痛い。くずれこむように布団に入り、泥のように眠った。窓の外からは、どこからともなくまだ宴の音楽が響いてくる。

こうして正月が終わると、気がつけば祭りの後のように心身ともに疲れ果て、街はまた一瞬静まりかえる。相変わらず店は休業中である。幸か不幸か、今年は正月の翌日は金曜日で土日の週末が続く。ラオスが新しい年のスタートを切るのは、週明けの 20 日になりそうである。